

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 26 日現在

機関番号：31104

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25463312

研究課題名(和文) 社会的スキルトレーニングを用いた看護学生のコミュニケーション教育プログラムの開発

研究課題名(英文) The development of a communication education program using social skills training for nursing students

研究代表者

阿部 智美 (Abe, Tomomi)

弘前学院大学・看護学部・講師

研究者番号：70347201

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、社会的スキルトレーニング(Social Skills Training)を用いたコミュニケーション教育の課題を解決し、より効果的な教育プログラムを開発するために、学習ニーズと練習スキルを明らかにすることを目的とした。1年目は、教員と看護学生を対象に、コミュニケーションに関する学習ニーズの質問紙調査を行った。2年目は、質問紙調査のデータ分析を行った。看護学生が学習を必要とする具体的なコミュニケーションスキルを把握するために、インタビュー調査を計画した。3年目は、インタビュー調査を行い、データを分析した。4年目以降は、教育プログラムを見直し、教育用の手引書としてまとめた。

研究成果の概要(英文)：This research aimed to find out necessary practice skills and learning needs for developing an educational program that can fulfill the tasks of communication education using Social Skills Training. In the first year, we conducted a questionnaire survey of nursing teachers and students for examining their learning needs on communication. In the second year, we analyzed the questionnaire data and prepared for an interview survey for grasping specific communication skills that nursing students need to learn. In the third year, we carried out interviews and analyzed their data. From the fourth year, we reviewed an educational program and prepared an educational guidebook.

研究分野：看護学

キーワード：コミュニケーション ソーシャルスキルズトレーニング 看護学生

1. 研究開始当初の背景

近年、看護学生のコミュニケーション教育が必要とされている。看護は患者・家族とのコミュニケーションを通して信頼関係を築くことが重要である。しかし、看護学生は患者とのコミュニケーションを難しいと感じることが多い。その要因としては、対象理解の不足、対応方法がわからない、学生の消極性、自信不足などが挙げられている(石井, 2007 岩脇ら, 2007)。そのような要因を解決するために、SST の技法を用いたコミュニケーション教育プログラムが有用であると考へた。

SST は社会的学習理論を基盤とした対人技能訓練で、日本では、当初、精神科領域で導入されていたが、現在、通常教育の授業に用いられている(前田, 2000 西園ら, 2009)。看護領域においても、看護者のコミュニケーションスキルトレーニングに用いられている(千葉, 2002 山田ら, 2005)。研究代表者は科研費(若手研究(B)平成 21~23 年度)にて、SST の技法を用いたコミュニケーション教育を考案し、学習者が捉える効果を明らかにするために、グループインタビュー調査を行った。その効果として、【対象の理解】や【対応方法の学び】、【コミュニケーションスキルの理解】、【自信の形成】、【不安の低減】等が得られている。

しかし、SST 運営の課題として、課題場面の設定、改善点の明示が難しいことが挙げられている(宮内, 1995 西園ら, 2009)。研究代表者が行った看護学生のコミュニケーション教育においても、同様な課題が挙げられた。SST は主にグループで、ロールプレイやフィードバックなどの技法を用いたプログラム(基本訓練モデル)に沿って進められる。SST では学習者が課題場面を決め、グループで改善点を話し合っ、練習するコミュニケーションスキルを決める。そのため、運営者は学習者の意見を活用しながら、SST を運営していくことが重要となる。

2. 研究の目的

本研究では、科研費(若手研究(B)平成 21~23 年度)にて実施したコミュニケーション教育の課題を解決し、より効果的な教育プログラムを開発するために、学習ニーズと練習スキルを明らかにする。明らかにした学習ニーズと練習スキルをもとに、教育プログラムの開発を行う。開発した教育プログラムは手引書としてまとめる。手引書を活用しながら、教育プログラムの実施・評価を行い、より有用なものに改善していくこととした。

初めに、学習ニーズについては、SST では、運営上の課題となる課題場面の設定を解決するために、学習者のニーズの把握を重視している(宮内, 1995)。学習ニーズは学習者個々に把握することが必要ではあるが、看護学生の課題場面や学習ニーズには、共通性が見られる。そのため、看護学生の学習ニーズ

の傾向を把握することは、課題場面の設定を容易にすると考へる。

次に、練習スキルについては、SST では、改善点の明示がしやすいように、課題場面ごとに、練習を必要とするコミュニケーションスキルを紹介している(宮内, 1995 ベラックら, 2005)。看護では患者に合わせたコミュニケーションスキルが重要となるが、看護学生が課題とする場面において適切なコミュニケーションスキルをいくつか把握しておくことは、練習が必要なスキルの明示を容易にすると考へる。

本研究では学習ニーズは文献レビューから調査項目を精選した質問紙調査を行う。練習スキルについては、インタビューを行う。文献レビューを基にした調査から、一般的な傾向を捉え、対象者の語りから、実践知を明らかにすることは、看護におけるコミュニケーションの理解に繋がり、教育プログラム開発に有用な資料となると考へる。

これらの調査結果をもとに、看護学生のコミュニケーション教育プログラムの開発を行う。教育プログラムの円滑な実施のために、手引き書を作成する。一般的な SST 実施方法に関する文献は数多くあるが、本研究の教育プログラムの手引き書においては、対象状況に応じた関わりの重要性や看護場面でのコミュニケーションスキルの特徴等、看護独自の視点を盛り込む。また、初めて参加する学習者が関心を持ち、安心して取り組めるように、SST プログラムの紹介を取り入れる。看護学生のコミュニケーションの特徴を踏まえた手引き書の作成は、看護基礎教育におけるコミュニケーション教育の資料としても役立つと考へる。

3. 研究の方法

1) 平成 25 年度

(1) 学習ニーズの計画書作成

学習ニーズ調査(質問紙調査)の研究計画書を作成し、研究代表者が所属する研究機関の倫理委員会で承認、調査協力施設の承諾を得た。

(2) 質問紙調査の実施

東北地方の看護師養成機関の学生と看護学領域の教員を対象に実施した。

2) 平成 26 年度

(1) 学習ニーズ調査のまとめ

調査データの分析を行い、対象者が捉える学習ニーズを明らかにした。練習スキル調査に向けた検討を行った。

(2) 練習スキルの計画書作成

練習スキル調査(インタビュー)の研究計画書を作成し、研究代表者が所属する研究機関の倫理委員会で承認、調査協力施設の承諾を得た。

3) 平成 27 年度

(1) 練習スキル調査の実施・まとめ

練習スキルの把握のためにインタビュー調査を看護学生対象に実施した。インタビュ

ーを分析し、対象者が捉える練習スキルを明らかにした。手引書の作成に向けて検討した。

(2) 学習ニーズ調査の公表

学習ニーズについて学会発表を行った。

4) 平成 28 年度

(1) 教育プログラムの検討

これまでの調査データをもとに教育プログラムの手引書を作成した。また、教育プログラムの評価方法の見直しを行った。

(2) 練習スキル調査の公表

練習スキルについて学会発表を行った。また、研究成果の学会発表等を通じて、教育施設からの研究協力が得られるように広報活動に力を入れた。

5) 平成 29 年度

(1) 教育プログラムの活用

手引書の一部を用いて、初学者を対象とした冊子を作成した。

4. 研究成果

1) 平成 25 年度

(1) 学習ニーズの計画書作成

教育プログラムの開発のために、看護学生のコミュニケーションに関する学習ニーズを調査することとした。研究計画の実施については、SST に関するワークショップに参加し、SST の動向等の情報収集を行った。先行研究や関連文献の検討を行い、看護学生のコミュニケーションに関する学習ニーズについての質問紙を作成した。質問紙は、基本的なコミュニケーションスキル、看護場面のコミュニケーションスキル、看護のコミュニケーション場面に関する内容で構成した。研究代表者が所属する研究機関の倫理委員会に研究計画書を提出し、質問紙調査の実施について承認を得た。

(2) 質問紙調査の実施

質問紙調査は、平成 25 年 12 月から研究対象施設に実施協力の依頼を行い、同意が得られた施設から実施した。平成 26 年 1 月末まで研究対象施設に質問紙調査の実施協力を依頼し、3 月末に質問紙調査を終了した。

2) 平成 26 年度

(1) 学習ニーズの調査のまとめ

対象者：東北地方の看護師養成機関の学生（カリキュラム上の看護学実習が全て終了した学生）と看護学領域の教員。調査期間：平成 25 年 12 月から平成 26 年 3 月。調査方法：自記式質問紙調査。調査内容： コミュニケーション・スキル：藤本・大坊（2007）の ENDCORE（簡易版）6 項目（尺度の使用や文末、選択肢の変更については著者から了承を得た）。看護場面のコミュニケーションスキル：先行研究をもとに作成した 8 項目。

コミュニケーション場面：先行研究をもとに作成した 10 項目。基礎看護学実習の学習段階での学習ニーズについて、全ての項目を 5 件法で尋ねた。分析方法：項目ごとに「とてもそう思う」「ややそう思う」とそれ以外に分けて集計し、学生と教員を比較するため

に²検定をした。倫理的配慮：研究目的や方法、倫理的配慮については文書を用いて説明した。質問紙は無記名回答とし、質問紙の提出をもって研究協力への同意とした。

研究協力が得られた看護師養成機関 20 校（看護系大学 4 校、看護専門学校 16 校）の学生 381 名（回収率 51.9%、有効回答率 87.0%）、教員 76 名（回収率 47.2%、有効回答率 80.9%）を分析対象とした。「とてもそう思う」「ややそう思う」を合わせた集計をみると、コミュニケーション・スキルでは、学生と教員共に「他者受容」が最も多かった。教員は学生に比べ 6 項目中 5 項目が有意に高かった。看護場面のコミュニケーションスキルでは、学生は「傾聴」が最も多く、教員は「傾聴」「関係形成」が同数で最も多かった。教員は学生に比べ 8 項目中 6 項目が有意に高かった。コミュニケーション場面では、学生は「不安を表出している場面」、教員は「会話が續かない場面」が最も多かった。教員は学生に比べ「初対面で話しかける場面」の項目のみ有意に高かった。

コミュニケーション場面では、他の項目に比べて学生と教員の差がみられなかった。このことから、基礎看護学実習の学習段階では、場面を通してコミュニケーションスキルを学ぶことが有効ではないかと考えた。また、今回の質問紙調査では、基礎看護学実習以降の各分野の看護学実習での学習段階についても尋ねたが、各養成機関の教育によっても学習ニーズは異なるを考える。一般的な傾向として捉えながら、学生個々のコミュニケーションスキルに応じた学習を検討していくことが重要であると考えた。

(2) 練習スキルの計画書作成

学習ニーズの結果をもとに教育プログラムの教育内容の検討を行った。看護学生が学習を必要とする具体的なコミュニケーションスキルを把握するために、インタビュー調査を計画した。研究計画は倫理委員会の承認を得て、次年度に実施することにした。

3) 平成 27 年度

(1) 練習スキル調査の実施・まとめ

対象者：看護学生 10 名（看護学実習を全て終了した学生）。データ収集方法：半構成的面接法によるインタビュー調査。インタビュー内容：実習経験から捉える看護のコミュニケーションスキル、看護学生に必要なコミュニケーションスキルの学習、看護学生が課題に挙げることが多い場面でのコミュニケーションスキル（会話が續かない場面、不安を表出している場面、看護師に報告する場面）。分析方法：インタビューの逐語録から目的に沿って、語りの内容を抽出、要約してカテゴリー化した。倫理的配慮：対象者へ研究の目的、方法、倫理的配慮について、書面と口頭で説明し、文書にて参加協力の同意を得た。

実習経験から捉える看護のコミュニケーションスキルについては、＜患者への態度＞

<コミュニケーションスキル>が抽出された。<患者への態度>では 関心を寄せる 気持ちに寄り添う 等、<コミュニケーションスキル>では 表情を理解する 対象に合わせて話す 等が抽出された。看護学生に必要なコミュニケーションスキルの学習については、<患者への態度> <自分から表現する> <皆と共有する> <自己の傾向を知る> <感情をコントロールする> が抽出された。看護学生が課題に挙げることが多い場面でのコミュニケーションスキルについては、会話が續かない場面では<目的を持つ> <無理に續けない> <場や話題を共有する> 等、不安を表出している場面では<話を聴く> <解決していく> <他者へ伝える> 等、看護師に報告する場面では<事前にまとめておく> <タイミングよく伝える> <アセスメントを伝える> 等が抽出された。

実習経験から捉える看護のコミュニケーションスキルは、患者への態度や表情を理解する等の具体的なコミュニケーションスキルが挙げられた。また、看護学生に必要なコミュニケーションスキルの学習は、自分から表現する、皆で共有するといったコミュニケーションスキルが語られていた。SST の技法を用いたコミュニケーション教育プログラムでは、グループで課題場面を共有し、対象の理解を深めながら、具体的なスキルを練習する。課題やスキルを提示しながら、学生の学習ニーズを取り入れた教育プログラムの必要性が示唆された。また、看護学生が課題に挙げることが多い場面でのコミュニケーションスキルについては、実習経験を通して学んだ具体的なスキルが語られていた。これらは教育プログラムでの練習内容を検討する際に活用できると考える。

4) 平成 28 年度

(1) 教育プログラムの検討

教育プログラムの手引書を見直した。手引書はこれまでの研究成果をもとに、コミュニケーショントレーニングに参加した学生からの感想を導入に加え、練習課題や練習スキルの紹介を追加し、練習がより効果的なものとなるように修正した。その他に、これまでのコミュニケーショントレーニングの実施経験を踏まえ、グループで練習するときに大切にしたいこと、実施方法、練習する際のポイント、付録(練習課題の記入用紙、実施後のアンケート)を加えた。

また、本年度の学会発表では、これまでの実施してきた研究成果や SST の技法を用いた看護学生のコミュニケーショントレーニングの実施方法を紹介し、その広報活動に努めた。しかし、当初の研究計画では、平成 28 年度は教育プログラムの実施・評価を行う予定であったが、実施には至らなかった。その理由として、教育プログラムの実施は、協力施設との教育内容や実施時期等の調整が必要となるが、未だ進んでいないことが挙げられる。そこで、当初の研究計画では、教育プ

ログラムの実施・評価は、複数の協力施設を調査対象とすることを予定していたが、1 施設においても教育プログラム評価が可能なように調査内容や時期等の研究計画の見直しを行った。

5) 平成 29 年度

(1) 教育プログラムの活用

これまで実施してきた学習ニーズ調査や練習スキル調査をもとに、初学者を対象としたコミュニケーション教育として冊子「初めての実習でのコミュニケーション」を作成した。冊子「初めての実習でのコミュニケーション」は、主に患者とのコミュニケーション(挨拶、コミュニケーションの開始、終了等)、実習場でのコミュニケーション(挨拶、報告・相談、カンファレンス等)から構成され、具体的なコミュニケーション例を記載した。冊子は実習前に配布し、説明を行った。実習を終了した学生を対象に、実習でのコミュニケーションの様子や冊子を用いて良かったところ・要望を尋ねる質問紙調査を行った。倫理的配慮として、対象者へ研究の目的、方法、倫理的配慮について、書面で説明し、質問紙の提出を持って研究協力の同意とした。本研究は所属機関の研究倫理委員会の承認を得て行った。

質問紙調査の記述には、患者とのコミュニケーションでは、良かったところとして挨拶や話題の例があり、場面や流れに沿って大切なポイントが説明されていたことが挙げられていた。要望として話題の例や援助時のコミュニケーションを取り上げてほしいと挙げられていた。実習場でのコミュニケーションでは、良かったところとして病棟への挨拶や実習目標の発表、報告の例が記載され、説明があること、色分けされていて見やすいことが挙げられていた。要望として報告内容の例を取り上げてほしいと挙げられていた。

今回は、初めて実習する学生を対象として作成したが、今後は、初めて看護過程を展開する学生を対象に、情報収集や援助場面でのコミュニケーション、バイタルサイン測定後の報告例等を追加し、学生の実習での学びを支援するコミュニケーション教育を検討していきたい。

6) 今後の課題

最終年度はこれまでの調査、手引書を活用し、初学者を対象としたコミュニケーション教育を行った。しかし、教育プログラムの実施は、協力施設との教育内容や実施時期等の調整が進められていない。また、プログラムの評価方法を再検討したが、その実施に至っていない。今後は、教育プログラムの実施を進め、その効果を明らかにしていきたい。

5 . 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

阿部智美、ソーシャルスキルトレーニングの技法を用いた看護学生のコミュニケーショントレーニングの学習効果：課題提供者とグループメンバーの比較、北日本看護学会誌、査読有、17(2)、2015、39-47
阿部智美、ソーシャルスキルトレーニングの技法を用いた看護学生のコミュニケーショントレーニングの効果、北日本看護学会誌、査読有、16(1)、2013、43-50

〔学会発表〕(計4件)

阿部智美、看護学生が考える学習を必要とする看護のコミュニケーションスキル、第36回日本看護科学学会学術集会、2016年12月11日、東京都

阿部智美、SSTの技法を用いたコミュニケーショントレーニングの課題の検討、第18回北日本看護学会学術集会、2015年8月29日、宮城県

阿部智美、看護学生のコミュニケーションに関する学習ニーズ調査 - 看護学生と教員との比較から -、第16回赤十字看護学会学術集会、2015年6月28日、東京都

阿部智美、SSTの技法を用いたコミュニケーショントレーニングの試み - 看護学生2年生と4年生を対象として -、日本看護研究学会第40回学術集会、2014年8月23日、奈良県

〔図書〕(計2件)

阿部智美、齋藤深雪、石本祥子、患者さんとのコミュニケーション Lesson 第1回 患者さんと初めて会うときのコミュニケーション、メヂカルフレンド社、クリニカルスタディ4月号、37(4)、2016、74-77

阿部智美、SSTの技法を用いた看護学生のコミュニケーション能力の育成、日総研、看護人材育成、11(6)、2015、55-60

6. 研究組織

(1) 研究代表者

阿部 智美 (ABE, Tomomi)
弘前学院大学・看護学部・講師
研究者番号：70347201

(2) 連携研究者

齋藤 深雪 (SAITOU, Miyuki)
山形大学・医学部看護学科・准教授
研究者番号：30333983